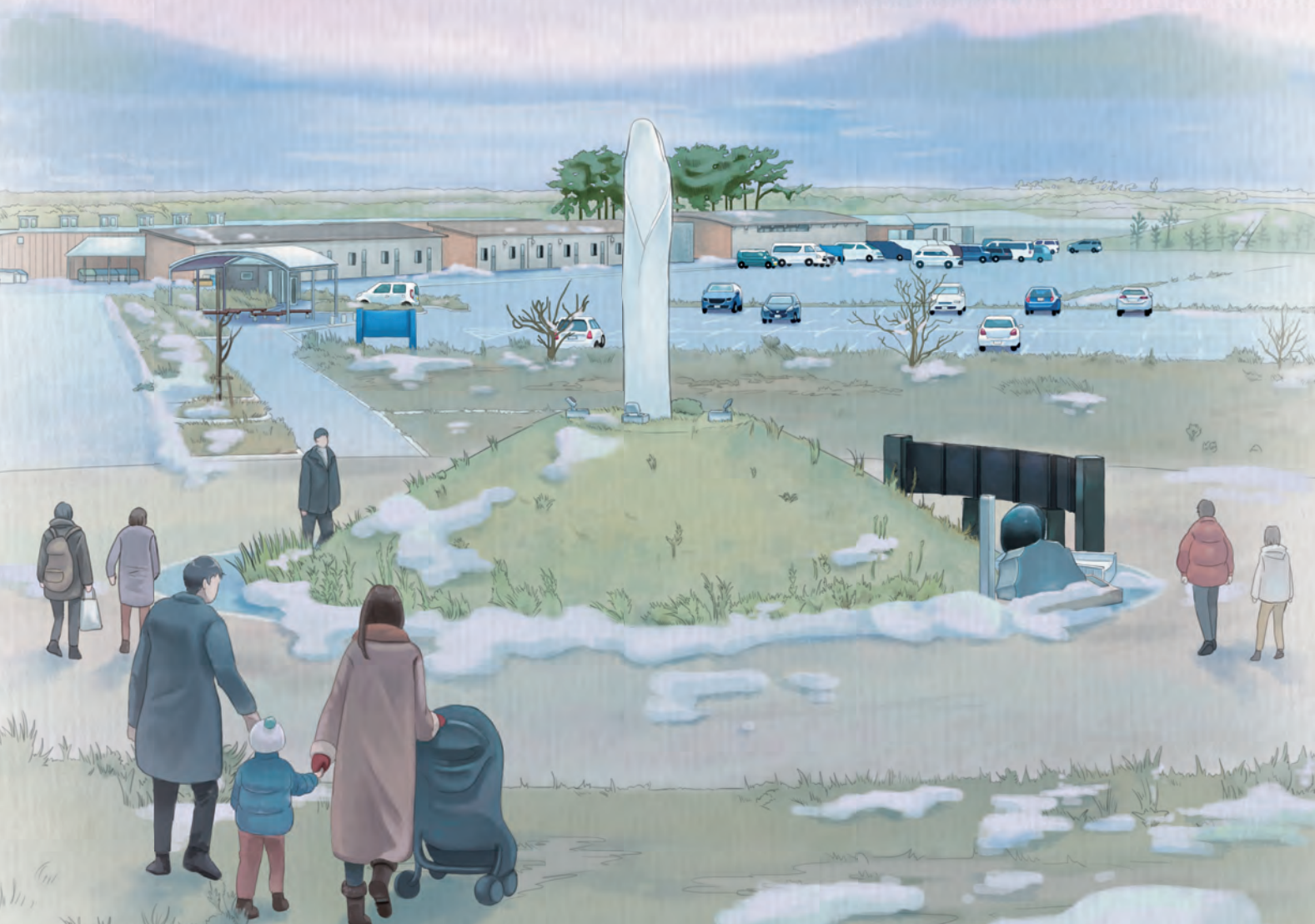


被災地を結ぶ、伝える活動

伝承ロード 縁

原発事故からの歩み伝える 福島県環境創造センター交流棟 「コミュタン福島」

女川町観光協会で「語り部」も務める阿部さん
岩手県立高田高等学校
モニターツアー同行レポート「ここでしか学べない教訓」を体験
仙台市若林区・浪分神社
復興、これからが本格ステージ 南相馬市
南三陸さんさん商店街
道の駅いわて北三陸





原発事故からの歩み伝える

福島県環境創造センター交流棟「コミュタン福島」

原子力災害を経験した福島の現状を知り、放射線について学べる「コミュタン福島」

東日本大震災と福島第一原発事故について伝え、放射線に対する不安や疑問にこたえる場として開所した、福島県環境創造センター交流棟「コミュタン福島」。福島第一原発事故を取り巻く社会の変化に応じる形で、今年3月には展示内容の一部をリニューアル。体験型の展示を通して子どもたちにも分かりやすく伝えられています。

三春町にある福島県環境創造センターは2016年に全面開所しました。日本では前例のない原子力災害からの環境回復に向けた研究を行うため、日本原子力研究開発機構（JAEA）、国立環境研究所、福島県の3機関で連携し、取り組んでいます。

施設は三つの棟で構成。環境中の放射性物質の分布や動きなどについて調査・研究する「研究棟」、環境放射能等のモニタリングなどを行う「本館」、そして一般向けの展示施設がある交流棟「コミュタン福島」があります。

原発事故によって生じたさまざまな課題に対応する総合的な拠点の整備は県にとっても急務であり、2012年の基本構想策定から4年で完成しました。

センターが立地する三春町は福島第一原発から約50キロ

距離にあり、避難対象地域には含まれませんでしたが、県内どこへでも車で1時間ほどでアクセスでき、モニタリング等のセンターの機能を効果的に発揮させるため、同町に整備されました。

研究成果を展示に反映

コミュタン福島は原子力災害と放射線に対する正しい知識を次世代へ伝えていくことを目的に整備されました。展示室入口を入ってすぐの部屋では、福島第一原発を襲った大津波と、そこから始まる原発事故から復興に向けた闘いを映像と当時の新聞記事で振り返ります。

震災から12年がたち、原発を取り巻く状況や社会情勢も変化していることから、今年3月に展示内容の一部がリニューアルされました。

新展示「マッピングふくし



ま」ではセンターのこれまでの研究成果を反映し、福島第一原発の水素爆発直後からセシウム137の飛散の状況を動画で表現。原発から北西方向へ運ばれ、雨により地上に降り注いだ様子が分かります。

また、目に見えない放射線を子どもたちに分かりやすく伝えるため、実際に触れられる測定器や、放射線の飛跡を可視化した「霧箱」など、子どもたちの興味・関心を引く展示を多く取り入れているのも特徴です。毎年、福島県内の半数以上の小学校の児童が訪れ、スタッフが展示内容の解説を行っています。

開館は午前9時～午後5時。入館無料。休館は月曜（祝日の場合は開館し翌平日休館）と年末年始。JR三春駅とセンターの間を町営バスが運行し、無料で利用できます。

放射線の正しい知識、次世代へ

福島県環境創造センター企画課主任主査の五十嵐さん

「放射線は目に見えません。県民の皆さんの不安にこたえるため、詳細なモニタリングと迅速な情報発信が不可欠でした」

そう語るのは福島県環境創造センター企画課主任主査の五十嵐俊則さん。福島第一原発事故直後に設置された、県災害対策本部において、モニタリング業務に携わりました。

当時は交代しながら24時間体制で、空間線量率のモニタリングなどに当たりました。

子どもへの影響を心配する親からの声も多く寄せられていたため、県内の学校など数千人所の放射線量の測定を実施。県のウェブサイトなどで数値を公開しました。

五十嵐さんは都内の大学で応用化学を学んだ後、当時都

山市にあった県環境センター（現在は環境創造センターに統合）で、大気中の成分の分析や水質検査などに従事してきました。

「事故前は有害物質等の分析に携っていましたが、放射線についての知識は全くなくJAEAの研究者から話を聞いたたり、インターネットで調べたりしながら、正に手探りのような状態でした」と振り返ります。

時を刻む3・11クロック

放射線モニタリングの業務に数カ月にはわたって従事し、五十嵐さんはその後、環境創造センターの立ち上げにも携わりました。現在はセンター交流棟「コミュニケーション福島」の企画運営や情報発信などに携わっています。

施設は福島県内の小・中学校が取り組む放射線教育の支援などをしており、毎年、県内の半数以上の小学校が来館しています。取材当日も会津

タッチパネル式で原発事故直後と現在の放射線量の比較などが簡単にできます



若松市やいわき市など3校が訪れており、福島第一原発とその周辺の事故後の様子を再現した模型や、放射線の性質についてゲーム形式で学べる展示などを興味深く見学していました。

「現在来館される子どもたちは震災を経験していませんが、誰もが真剣な表情でスタッフの話を聞いてくれます。福島での日起こしたこと、そして放射線の正しい知識を私たちが子どもたちに伝え、そして次の世代につないでいってほしい」と五十嵐さん。

福島第一原発事故から12年がたち、帰還困難区域以外の生活圏の面的除染は終了。県内の空間線量率は全国の主要



原発事故からの本県の復興の歩みを大型ビジョンの映像で学べます

都市と比べ、同水準にまで下がっています。

しかし、県土の7割を占める山林の除染は手付かずのまま、野生動物への影響も詳しく分かっていません。放射線に対して未知の部分はまだまだ多く、調査・研究は今後も続きます。展示室の中心には、地震発生時刻から現在も時を刻む「3・11クロック」が設置され、福島での復興に費やしてきたこれまでの時の流れを感じます。

「快適な暮らしを追求するあまり、かけがえのない環境に影響を及ぼしてしまうことを私たちは身を持って知りました。科学技術を過信しないことが大切です」と五十嵐さんは訴えます。



「沿岸部の伝承施設と比べて認知度が低いのが課題。情報発信に力を入れた」と五十嵐さん

思いを
「発信」

悲しい事実の先に未来がある

女川町観光協会で「語り部」も務める阿部さん

一般社団法人女川町観光協会の阿部こころさんは主にイベントやPRを担当する傍ら、語り部としても活動する震災伝承の若手ホープ。高校生の時は町の臨時災害放送局のアナウンサーとして活躍。その発信力は今の仕事にも息づいています。「女川が大好き」。そんな思いを胸に、古里の未来を思い描きながら震災伝承の在り方を模索しています。

東日本大震災で甚大な被害を受けた女川町も復興が着実に進み、JR女川駅前に2015年12月にオープンした商業エリア「シーパルピア女川」に隣接する女川湾を望む場所に、観光案内所を兼ねた協会の事務所があります。



高校生アナウンサーの頃の活動も含め、「多くの人との出会いが楽しい」と阿部さん

阿部さんは昨年4月、協会に入職。「町の祭りも復活したり、新たに始まったりしました。町内イベントの事務局として調整を行ったり、町外に出展し特産品を販売しながら観光PRを行うのが主な仕事ですが、大きな組織ではないので何でもやります」と笑顔で話します。

町内には組織だった語り部活動はなく、協会がその役割を担っています。阿部さんら女性2人のスタッフが中心となり、女川駅から商業エリアを通り震災遺構「旧女川交番」までを案内。女川町まちなか交流館でスライドや映像で被災当時の様子を紹介しながらの講話や、バスに乗りながらの車窓ガイドも行っています。

「大人の方の視察は震災後の行政や商業の動きに着目します。事前に女川のことを調べて来てくれます。女川はスポーツ合宿が盛んで子ども

の震災学習も担当しますが、伝え方を工夫し、かみ砕いて説明すると真剣に興味を持って聞いてくれます。うれしいですね」と阿部さん。

地元の情報、常に発信

自身は小学6年の卒業間近に震災を体験しました。「海の中にいる動機先から小学校に迎えに来た母と一緒に、再び勤め先に戻ろうとしたら、母の知人と会い、津波が来ることを知りました。戻っていたら今がなかったかも」と振り返ります。

石巻市内での見なし仮設住宅暮らしを経て、高校2年の時に女川町に再建した住宅に戻ってきました。「気分が落ち込んだ時期もありましたが、

それを経て今の自分があり、決して無駄ではなかった」と前を向きます。

女川に戻る直前から「女川さいがいFM」で高校生アナウンサーとして活動を開始。閉局などを経て今は観光協会スタッフへと立場は変わりましたが、女川の情報発信に懸ける思いは変わりません。

「震災の悲しい事実から目を背けられない面はありますが、語り部として町の現状や未来も紹介し、つらいことだけではいいことを発信していきたい」と語ります。



かつては女川さいがいFMで高校生アナウンサーとして活躍



所在地/女川町女川2-16-5
TEL0225-54-4328



左から中野さん、熊谷さん、村上さん。熊谷さんが持っているのは学校が企画した保存用の缶入りパン。3人の後ろには学校の実習船が震災の津波で漂着した米国の高校からの記念品が展示されています

防災や震災伝承 校外と交流

岩手県立高田高等学校

東日本大震災の津波で校舎が全壊した陸前高田市の岩手県立高田高等学校(菅野幸貴校長)は、2015年度に新校舎での授業が始まりました。普通科と海洋システム科があり、在校生は被災世帯が多く、震災を記憶する最後の世代。防災や震災伝承の活動を通じ、校外との交流も活発です。

同校では「総合的な探究の時間」の中の活動チームの一つとして防災チームがあります。現在は5人の生徒が在籍し、村上佳厘奈さん、熊谷汐音さん、中野和子さんの3人は普通科2年生。チームでは市民が避難をしやすいするにはどうしたらよいかや、小さい子どもの避難の仕方などを研究しています。

3人は4歳の時に震災を体験しました。熊谷さんは「保育所でお昼寝の時に大きな揺れが来ました。数日前からたびたび地震があり、先生の指示で枕元に靴を置き、服を着たまま。素早い避難につながり

ました」と振り返ります。

立教大とのフィールドワークは今年で3年目を数え、9月に市内で合同の発表会を開きました。防災チームは事前学習で市役所の防災担当者や消防署、津波の犠牲となった外国語指導助手と親しくしていた市民の話や、震災時に避難所暮らしをした外国出身の女性の声を発表しました。

避難の在り方を模索

「幼い子と避難所に身を寄せたそうです。子どもが泣くと心ない言葉を浴びせられるなど、大変な思いをしたことが胸に刺さりました」と村上さ

ん。こうした話も元に避難の在り方を模索しています。

今年の夏休みには村上さんと中野さんが陸前高田市の共生社会実現プログラムの一環で同市の復興を支援したシンガポールへ、熊谷さんは岩手県の平和学習で長崎県を訪問。それぞれ現地では震災の出来事を紹介し、防災も呼び掛けました。

中野さんは「ホームステイ先では震災を知っていました。避難に対するイメージが薄く、私たちに丁寧に大切さを説明しました」と語ります。

12月にはシンガポールで交流した現地の男子高校生1人が約1週間、同校に留学、また京都市内の高校の生徒も来校し震災をテーマに交流を図る予定です。



外国出身の女性を招き6月に開いた講演会。全校生徒を代表して防災チームのメンバーが質問した

モニターツアー同行レポート 「ここでしか学べない教訓」 を体験

津波の脅威や震災の教訓を伝えるスポットが多く集まる宮城県東松島市。全国から多くの人たちが訪れ、体験や教訓を学んでいます。今回は3.11 伝承ロード推進機構が震災伝承施設のネットワークを活用した企業・団体の研修などに役立ててもらおうとコンテンツの磨き上げを行った「モニターツアー」の様子をレポートします。



1 住民らの要望によって駅の連絡通路として残された震災復興事業の早期整備実現に寄与したベルトコンベヤーの設置跡を見学しました



2 高台にインフラごと移転一大プロジェクト秘話



2 3 野蒜市民センターで野蒜地区の震災時の状況と市民協働で行われた野蒜ヶ丘団地の街づくりについて学び、現地の様子をバスで見学 4 普段から住民たちが足を運びやすい場にとあずまやなどが整備された私設の津波避難所「お佐藤山」 5 被災し廃線となったJRの線路跡は現在遊歩道に。列車が津波を免れた地点まで歩くことで、高低差も実感できました

ガイドを務めたのは団地の住民の一人で、市民グループ「SAY'S 東松島」代表を務める防災士の山縣嘉恵さん。山林を切り拓いて団地が造成された経緯、地域自治組織を中心とする市民協働の街づくりについて、プロジェクトに

ガイドを務めたのは団地の住民の一人で、市民グループ「SAY'S 東松島」代表を務める防災士の山縣嘉恵さん。山林を切り拓いて団地が造成された経緯、地域自治組織を中心とする市民協働の街づくりについて、プロジェクトに

高台にインフラごと移転一大プロジェクト秘話

高台にインフラごと移転一大プロジェクト秘話

ガイドを務めたのは団地の住民の一人で、市民グループ「SAY'S 東松島」代表を務める防災士の山縣嘉恵さん。山林を切り拓いて団地が造成された経緯、地域自治組織を中心とする市民協働の街づくりについて、プロジェクトに

ガイドを務めたのは団地の住民の一人で、市民グループ「SAY'S 東松島」代表を務める防災士の山縣嘉恵さん。山林を切り拓いて団地が造成された経緯、地域自治組織を中心とする市民協働の街づくりについて、プロジェクトに

高台にインフラごと移転一大プロジェクト秘話

高台にインフラごと移転一大プロジェクト秘話

ガイドを務めたのは団地の住民の一人で、市民グループ「SAY'S 東松島」代表を務める防災士の山縣嘉恵さん。山林を切り拓いて団地が造成された経緯、地域自治組織を中心とする市民協働の街づくりについて、プロジェクトに

ガイドを務めたのは団地の住民の一人で、市民グループ「SAY'S 東松島」代表を務める防災士の山縣嘉恵さん。山林を切り拓いて団地が造成された経緯、地域自治組織を中心とする市民協働の街づくりについて、プロジェクトに

高台にインフラごと移転一大プロジェクト秘話

高台にインフラごと移転一大プロジェクト秘話

ガイドを務めたのは団地の住民の一人で、市民グループ「SAY'S 東松島」代表を務める防災士の山縣嘉恵さん。山林を切り拓いて団地が造成された経緯、地域自治組織を中心とする市民協働の街づくりについて、プロジェクトに

ガイドを務めたのは団地の住民の一人で、市民グループ「SAY'S 東松島」代表を務める防災士の山縣嘉恵さん。山林を切り拓いて団地が造成された経緯、地域自治組織を中心とする市民協働の街づくりについて、プロジェクトに

高台にインフラごと移転一大プロジェクト秘話

高台にインフラごと移転一大プロジェクト秘話



⑥丁寧で分かりやすい語り口で命を守る行動の大切さを伝える「SAY」S東松島代表・山縣嘉恵さん ⑦津波が2階近くまで押し寄せた駅舎を活用した東松島市震災復興伝承館で当時のエピソードを聞きました ⑧昼食はそば処 奥松庵(東松島市野蒜北余景18-6 奥松島クラブハウス内)で東松島の特産品であるノリを練り込んだ「海苔(のり)そば」を堪能 ⑨「松島四大観」の大高森近くにあり、冬季は「かき小屋」が営業する宮戸地区の観光拠点「あおみな」で休憩も



※12月に発売される実際のツアー商品はコースが一部変更される場合があります

- ①野蒜ヶ丘団地(野蒜市民センター、宮野森小学校ほか)／東松島市野蒜ヶ丘
- ②私設避難所「お佐藤山」／東松島市野蒜北針生1 ※私有地
- ③運行中の列車が津波を免れた地点／案内看板:東松島市北針生1-2、被災地点:東松島市亀岡59-4
- ④野蒜駅連絡通路(震災復興事業の早期整備実現に寄与したベルトコンベヤー設置跡)／JR野蒜駅
- ⑤東松島市東日本大震災復興祈念公園(東松島市震災復興伝承館、祈念広場、震災遺構旧野蒜駅プラットホーム)／東松島市野蒜北余景56-36
- ⑥あおみな／東松島市宮戸字川原5-1

3.11伝承ロード研修会

企業や団体向けに青森、岩手、宮城、福島各県の沿岸地域の震災遺構や伝承施設、復興施設を選定し1～3日間の研修を提案。施設の見学には専門のガイドまたは語り部を配置します。研修は10人以上から(応相談)、コースや内容、期間により研修費は異なります。他では見られない行政などの防災施設見学の手配も可能です。問い合わせは一般財団法人3.11伝承ロード推進機構TEL022-393-4261、Eメールinfo@311densho.or.jp

3.11伝承ロード 検索



現地で聞ける貴重な学び
12月にツアーを商品化

東松島市特産のノリを練り込んだそばの昼食の後は、追悼と鎮魂を祈念する慰霊碑の

ある「東松島市東日本大震災復興祈念公園」を訪問。震災遺構である「旧野蒜駅プラットホーム」を中心に整備された公園で、津波でゆがんだ線路などを震災直後の姿のまま見ることができま

園内にある旧野蒜駅の駅舎をリニューアルして開設された東松島市震災復興伝承館ではアーカイブ映像を見た後、被災前後の市内の様子や復旧、復興の状況などを紹介するパネルや、子どもたちへの鎮魂の思いを込めた「青い鯉のぼりプロジェクト」、東松島市に届けられた千羽鶴を活用したモ

ニューメントなどについて、伝承館のスタッフに解説してもらいました。

「被災したその場で、その時のエピソードが聞けるのでイメージしやすい」「命を守る行動と意識の大切さを痛感した」と参加者たち。

アンケートには「雨天時は足元が心配」「レジャー要素を盛り込んだ方が良い」といった回答も寄せられ、内容をブラッシュアップしたツアーが12月に発売される予定です(詳細は一般財団法人3・11伝承ロード推進機構のウェブサイトで告知します)。

「波を分ける」伝説

仙台市若林区・浪分神社

地域に残された昔話や言い伝え、民俗芸能、信仰の対象などから過去の災害の記録をたどり、先人の教えに学びます。今回は、津波の教訓を継承する「浪分神社」を紹介します。



由緒書きを読む

もと、稲荷神社といひ八瀬川稲荷堂（共同墓地）あたりになつた。（中略）ここに隠居、又右衛門の肝いりで村民相集つて小祠を創建した。時に元禄16（1703）年8月16日であつた。古老の談では、その後あるとき大津波あり、幾波となく押し寄せせ多くの溺死者を出したがやがて白馬に跨った海神が現われてこの大波を南北に二分して鎮めたと伝えられている。これ以来稲荷神社に対する津波鎮撫の霊力信仰が高まり、その名も「浪分大明神」と呼ばれるようになった。しかしこれは単なる伝説だけでない、この地方は古来幾度となく津波・洪水に襲われているうちに今の地形地層が出来て伝説も生まれたのである。この地方に大きな影響を及ぼした記録では、貞観11年（869年）5月26日の三陸地方大地震大津波であり、慶長16年（1611年）の慶長三陸大津波では、仙台領内で1700人余の死者を出した。また天保6年（1835年）6月25日発生の東北地方太平洋東部の大地震大津波でも仙台領内で数百の民家が流失し溺死者多数と伝えられているが、この時、白馬伝承が成立したと言われている。（中略）これに続いて天保6年閏7月に2回も大洪水あり、天保10年まで全国的に荒天が続き冷害となり天保の大飢饉となる。この惨事を救うべく当時の神主津田民部は（中略）500メートル程西方の現在地を占し（中略）お堂を建て、翌天保7年（1836年）2月12日、新たに祭神、**鵜飼草葺不合尊**（うがやふきあえずのみこと）のご神体を奉納、石造り神明大鳥居を配し、除災を祈願された。爾来津波の災害も減少した。明治38年（1905年）日露戦争勝利後、浪分神社に昇格、明治43年（1910年）3月、旅立稲荷神社（保食神社 若林二丁目）に合祀された。最近本殿の腐朽甚だしく、氏子町民相計り改築の運びとなり、昭和50年9月15日落成、遷座式を執行した。（中略）今はあらゆる除災招福の神社として崇敬されている。

（「浪分神社の由来」平成23年8月若林区霞目町内会）



- 浪分神社
仙台市若林区霞目2-15-37
- せんだい3.11メモリアル交流館
仙台市若林区荒井字字形85-4
TEL022-390-9022

1611年の「慶長三陸津波」をはじめ、たびたび津波や洪水被害に見舞われてきた仙台市若林区霞目に「稲荷神社」として創建。押し寄せた津波が、ここで二つに分かれたという伝説から浪（波）を分ける、現在の名前で呼ばれるようになったといわれる神社です。

現在地から約2^キ離れた仙台市地下鉄東西線荒井駅舎併設の「せんだい3・11メモリアル交流館」1階交流スペースの「仙台市東部沿岸メモリアル立

体地図」では、東日本大震災の津波浸水域と地形の関係を紹介。これを見ると現在の浪分神社の付近が、津波到達の境になつていことが分かります。「丘陵部もある松島などの地域と比べて平坦で広大な仙台市東部沿岸地域は広い面積で津波の被害を受けています。



はなはなプロジェクト浪分桜第1号

この立体地図の浸水域は津波被害の後、国土地理院が衛星画像を判定して作成したもので、雪の影響もあつて実際の浸水域よりもやや内陸までこの立体地図の浸水域は津波被害の後、国土地理院が衛星画像を判定して作成したもので、雪の影響もあつて実際の浸水域よりもやや内陸まで



仙台市東部沿岸メモリアル立体地図（部分）。無着色部分が浸水域

つなぐ、よりそう、いどむ。

復興、これからが本格ステージ 南相馬市



福島ロボットテストフィールド



お話を伺った方
門馬和夫市長

福島県相双地域の中心都市で、風光明媚な海岸線が延びる南相馬市は2006年に1市2町が合併して誕生しました。その5年後に襲った東日本大震災と東京電力福島第一原発事故からの復興・再生を成し遂げるには、将来にわたり持続可能なまちづくりを進めることが重要。元々あった全国の地方都市共通の問題に加え、新たな課題とも向き合い、一つずつ丁寧に解決を図っています。

南相馬市は震災で死者1156人(関連死520人含む)、負傷者59人、住家被害は全壊1277世帯、大規模半壊178世帯、半壊1190

世帯、一部損壊2667世帯を数えました(2023年3月31日現在)。

原発事故では市域の大半が福島第一原発から半径20kmの警戒区域と、半径30kmの緊急時避難準備区域に入りました。

市域西側の山間部は半径20kmより外側でも計画的避難区域とされ、警戒区域と同様に住民は避難を余儀なくされました。市の南西の山間部には今も帰還困難区域があります。

門馬和夫市長は震災時に市の幹部職員として、その後市議会議員を経て2018年1月、市長に就任しました。

「震災からの12年、多くの心温まるご支援をいただきながら、市民と行政が一体となって苦難を乗り越え復旧・復興を着実に進めてきました。しかし、いまだ多くの方が市外に避難し、旧避難指示区域の小高区の人口は震災前の3割



震災時の被災状況(小高区岡田)

程度、年少人口は約1割にとどまるなど、原子力災害からの復興はこれからが本格的なステージと捉えています」と語ります。

一方で福島県が福島イノベーション・コースト構想に基づき、南相馬市に整備した「福島ロボットテストフィールド」は陸・海・空のフィールドロボットを対象とした、世界に類を見ない一大開発実証拠点です。「ロボットのまち南相馬」を新たなテーマに、関連産業を中心にさらなる発展を目指す動きもあります。地元企業と進出企業が連携し、新たな分野へのチャレンジが生まれています。

第三次総合計画を策定

南相馬市では本年度、第三次総合計画を策定しました。「未来の南相馬の姿」をまちづくりの基本目標に、「100年のまちづくり〜家族や友人とともに暮らすまち〜」を掲げ、

今後8年間で市民が震災と原発事故からの復興を実感できることを目指します。門馬市長は「かけがえない未来のために、今私たちが何をすべきか、何ができるのか、みんなが夢や希望を一つ一つ形にしていきたい」と強調します。

「市の誕生から16年、震災と原発事故から12年という歩みを大切に、今まで積み重ねてきた努力の成果を形にし、次の世代へしっかりと『つなぐ』こと、互いに思いやり『よりそう』こと、前例に捉われない柔軟な発想で何事にも果敢に『いどむ』ことが重要と考え、引き続きまい進したい」と決意を新たにしています。

南相馬市を含む相双地域には、天明の飢饉の際に「報徳仕法」(二宮尊徳の教えを取り入れ、暮らしを立て直した歴史があります)。「その教えは今の私たちに根付いています」と門馬市長。「先人たちが幾多の災害や飢饉を乗り越え、地域の復興を果たしたように、私たちも10年、100年先の世代が安心して暮らせるよう、しっかりとまちづくりを行い、復興や新しい挑戦に取り組んできた姿を後世に伝承していくべき」と言葉に力を込めます。

商店主が結束し開設 商業と震災伝承の要

南三陸さんさん商店街

宮城県南三陸町志津川地区にある「南三陸さんさん商店街」は、被災した商店主らが協力して2012年に開設した仮設商店「南三陸さんさん商店街」が始まり。津波の爪痕が残る中、「サンサンと輝く太陽のように、笑顔とパワーに満ちた商店街に」という思いを込め「さんさん商店街」の名前が付けられました。



南三陸杉を用いた商店街は、建築家の隈研吾さんが設計

仮設商店街は当初予定していた5年の営業を終え、17年3月3日に現在地に移転。南三陸杉を用いた平屋6棟で構成する常設商店街になりました。22年には商店街の隣に震災伝承館「南三陸311メモリアル」が開館。商店街は同時にオープンした「道の駅さんさん南三陸」の一つになりました。現在の商店街には飲食、物販、理美容など27店舗が軒を連ねます。飲食店が多く、共用の飲食スペースを設置。地元食材をふんだんに使った「南三陸キラキラ丼」も集客につながっています。



志津川地区の復興まちづくりの様子を伝える看板

3代目商店街会長の山内大輔さんは「仮設商店街の時から食に力を入れているのが強み。キラキラ丼は震災後に販売の休止を余儀なくされましたが、間もなく復活。商店街や周辺の飲食店が四季ごとの丼を作り、町を代表するグルメになっています」と説明します。

町一番のにぎわい

商店街がある道の駅には旧防災対策庁舎が立つ南三陸町



佐良スタジオの写真展示館の入館料は大人100円、中・高校生50円

震災復興祈念公園、南三陸311メモリアルが集まり、震災から12年以上が経過しても「被災地の現状を知りたい」と訪れる人が後を絶ちません。山内さんは「コロナ禍、海外に行く代わりに南三陸に来てくれた修学旅行生がいました。震災伝承館で学んで、商店街でおいしいものを食べて、震災当時や現状を知ってもらえたと思います」と話します。商店街の店主や従業員のほとんどが被災。知人が命を落としたという人もいます。家が鮮魚店の山内さんも、住まいを兼ねた店舗を失いました。「人口流出が進み、町がなくなるのでは」という声が上がる中、「亡くなった方の分まで、自分たちが商売をして町を盛り上げよう」と仮設から始めた商店街は、今では町一番のにぎわいです。

各店、独自の取り組みにも注目です。例えば、「佐良スタジオ」は店内に「佐藤信一常設写真展示館「南三陸の記憶」」を開設。震災から復興、現在に至る町の移り変わりを写真で伝えています。

震災の脅威を語り継ぎ、また町の主要商業観光施設として、山内さんは「地域の活気之源であり続けたいです」と力を込めます。



所在地/南三陸町志津川字五日町201-5
TEL0226-25-8903

久慈市・南三陸町の震災伝承施設

- 高野会館 南三陸町志津川字汐見町32-1
- 海に見える命の森 南三陸町志津川字黒崎80・81
- 南三陸町東日本大震災伝承館 南三陸311メモリアル 南三陸町志津川字五日町200-1
- 南三陸町震災復興祈念公園 南三陸町志津川字中瀬町、字廻館前、字塩入、字汐見町内

三陸道全線開通が追い風 久慈広域の周遊観光を促進

道の駅いわて北三陸

国道45号沿いにある「道の駅いわて北三陸」は久慈市、洋野町、野田村、普代村の久慈広域の交流拠点として2023年4月に開業しました。震災伝承施設「久慈市地下水族科学館 もぐらんぴあ」に最も近い道の駅で、物販、飲食、公園など施設が充実。市内外から幅広い世代が訪れています。



地場の新鮮な食材が並ぶ物販コーナー

東京で飲食業の仕事をしていましたが、震災をきっかけに退職して帰郷。盛岡市を拠点に震災のボランティアや復興プロジェクトに携わった後、

自然災害に見舞われた全国の被災地の復興支援に取り組んでいました。

縁あって、道の駅いわて北三陸の駅長に就任した大向さんは「三陸沿岸道路が全線開通し、宮城県や、八戸市をはじめ青森県からも気軽に遊びに来ていただけるようになりました。観光客の方も多くなりました。観光客の方も多くなりました」と現状を説明します。

周辺の道の駅と連携

道の駅は久慈市に3施設、さらに洋野町、野田村、普代村に1施設ずつあります。大向さんは「お薦めのスポットを開かれたら、目的地までの最短ルートを紹介するのはなく、他の道の駅を経由して向

かっていただけのように案内しています。道の駅間の魅力も広めたいです」と思いを話します。

情報発信・休憩スペースに観光案内所を設け、連携する4市町村の観光パンフレットやPR動画を用意しています。

地域の魅力あふれる物販・飲食コーナーに加え、子育て世代向けの施設が充実。屋内のキッズスペースにはスライダースペースにはスライダースペースが付いた大型遊具を設置。屋外にはゲームやアニメで大人気の「ポケットモンスター」の「いわて応援ポケモン」イシツブテをはじめ、

岩タイプのキャラクターがデザインされた遊具が設置された「イシツブテ公園」があります。



連携している4市町村の観光情報を発信

第3分類（訪問しやすく、案内員の配置や語り部活動など、来訪者の理解しやすさに配慮している施設）と、第2分類（公共交通機関等の利便性が高い、近隣に有料または無料の駐車場があるなど、来訪者が訪問しやすい施設）のみ掲載。

- 久慈地下水族科学館 もぐらんぴあ
久慈市侍浜町麦生町第1地割43-7
- ケルン・鎮魂の鐘と光
久慈市長内町第42地割（JC公園内）

す。大向さんは「観光、交流、憩いの場とさまざまな使い方をしてもらいたいです」と願います。

道の駅は震災による津波被害がなかった場所に立ちますが、災害はいつどこで発生するか分かりません。自家発電や物資を備えているのはもちろん、大向さんは自身の経験からも防災対策をより強化していく考えです。



所在地 / 久慈市夏井町鳥谷第7地割3-2
TEL0194-66-8830



岩手県産カラマツやヒノキを用いた平屋の建物は周囲の自然と調和

東日本大震災の復興道路として国が進めていた三陸沿岸道路の久慈北インターチェンジの近く、田園地帯の一角に道の駅いわて北三陸は建設されました。津波が襲来した久慈市、洋野町、野田村、普代村と太平洋沿岸の4市町村が連携して整備したもので、久慈広域の周遊観光の拠点を目指しています。

運営は指定管理者のシダックス大新東ヒューマンサービスが行っています。スタッフのほとんどは、久慈市や近隣市町村の出身者。駅長の大向昌彦さんも久慈市生まれです。

記憶や教訓を伝えるラジオ番組 2024年2月10日(土)に初回放送

当機構では2021、22年度に引き続き、23年度のラジオ番組を来年2月10日(土)に始めます。放送の狙いは①東日本大震災の記憶や教訓を伝え、防災力の向上に貢献②震災の風化の防止③震災伝承施設・遺構への関心の醸成、被災地域の活性化支援。震災から10年余りが過ぎ、ラジオのリスナーに震災の真実や教訓を振り返ってもらう契機となる番組を制作します。

23年度番組の全体概要は別表の通り。過去2年の放送と同様に2月上旬から3月上旬までの週1回、5週連続の番組となります。青森、岩手、宮城、福島の前被災4県の各民放ラジオで放送します。

21年度は「生きる教訓3.11伝承ロード」のタイトル。八戸市みなと体験学習館(青森)、釜石市のちをつなぐ未来館(岩手)、気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館(宮城)、

東日本大震災・原子力災害伝承館(福島)といった震災伝承施設や震災遺構の関係者、大学生にも出演してもらい、震災当時を振り返り、今の思いを伝えてもらいました。

22年度はタイトルが「3.11伝承ロード あの日の使命感」。震災当時、一般市民が知らなかった困難に遭遇し、それを乗り越えた企業・団体の隠れた苦労や社会貢献にスポットを当てました。石巻地区広域行政事務組合石巻消防署や東北電力ネットワーク栗原登米電力センターの職員、福島県警察本部警務部総務課広報官の他、震災直後に釜石市から大槌町までの道路啓開に携わった「株式会社テラ」、福島市内の除染ボランティア活動に参加した「合同会社森の人」の各代表者に出演してもらいました。

過去の番組は当機構のウェブサイトで見られます。23年度の番組にも、ぜひご期待ください。

2023年度番組 全体概要	テーマ	建設業関係者が復旧・復興工事において体験した苦労談や工事関係者・地域住民から寄せられた声をナビゲーターとの対談形式で振り返り、隠された企業の社会貢献を明らかにする	放送内容	放送エリア:被災4県
	出演予定者	被災3県(岩手、宮城、福島各県)の建設業関係者		放送回数・時間:5回・15分間/回 放送予定日:2月10日(土)~3月9日(土)の5週連続 ■ tbc東北放送 ……土曜 18:30~18:45 ■ RAB青森放送 ……土曜 8:30~8:45 ■ IBC岩手放送 ……土曜 18:00~18:15 ■ rfcラジオ福島 ……土曜 16:25~16:40

表紙

被災地を歩く

「亡き人を悼み 故郷を想う」 東日本大震災慰霊碑(名取市)

仙台湾と名取川の河口に面する名取市閑上地区は、江戸時代には仙台藩直轄の漁港として栄え、平坦な土地だけに農業も盛んだった。その歴史は現代まで脈々と続き、南北に延びる海岸線は風光明媚で、仙台からの気軽な行楽地として親しまれてきた。震災前は多くの住宅も並び、2000世帯余り5700人ほどが暮らしていた。しかし、その恵まれた立地が震災ではあだとなった。津波が容赦なく襲い、約750人が犠牲に。市全体では1000人近い尊い命が失われている。

名取市の「東日本大震災慰霊碑」は、この閑上地区に設置された。「種の慰霊碑」から発芽した「芽生えの塔」が、この地に豊かさが戻ることを願う「豊穰の大地」から上へ上へと伸びていく様子を表現。震災の犠牲者が天に上っていくイメージを表すとともに、震災を克服し、復興に向けた決意を新たにす気持ちを

込めたモニュメントだ。慰霊碑の高さは「豊穰の大地」も含めて8.4m。この地を襲った津波の高さを示している。

「亡き人を悼み 故郷を想う 故郷を愛する御霊よ 安らかに」。 「種の慰霊碑」に刻まれたメッセージだ。犠牲者を悼む心とともに、震災で故郷を失った人の思いが込められている。慰霊碑左右の芳名板には犠牲になった市民と市内で亡くなった人の計960人の名が記されている。この慰霊碑を未来まで残し、大切に守ることで、震災の記憶を未永く将来世代まで伝えていく。

